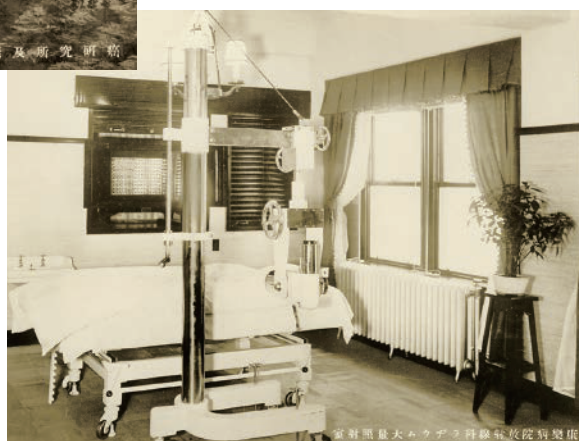




櫻井錠二氏



長與又郎氏

癌研究会研究所および康楽病院
開所開院記念撮影

至誠通天 —ラジウム、がん治療の救世主に—

1895年、レントゲンによってX線が発見され、翌年アンリ・ベクレルはウラン化合物が放射線を発することを発見する。この発見により、ベクレルの名前は、放射能の単位として残されることになった。1903年、マリー・キュリーはベクレルと夫のピエールとともに放射現象における共同研究で女性初のノーベル物理学賞を受賞した。キュリー夫妻はこのベクレルの発見をさらに研究して、1898年ウラン化合物からポロニウムとラジウムを発見した。この発見で、キュリー夫人は、1911年に二度目のノーベル化学賞を受賞した。

1900年、ドイツの医学者によって「放射線が生物細胞組織に影響を与える」という論文が発表され、ピエールは医学教授らとの共同研究の結果、ラジウムには変質した細胞を破壊する効果があることを確認した。これは皮膚疾患や悪性腫瘍を治療する可能性があるとしてキュリー療法と呼ばれ、ラジウムが妙薬として知られるようになった。

1903年、ストラスブルグの万国測地学会に出席した田中館愛橘が、5mgのラジウムを2個購入して日本に帰国した。この後日本でも1904年には肺ジストマ患者の胸部にラジウムを貼り付けて治療した事例が報告され、1911年には外科、皮膚科でのラジウム利用が報告されている。さらに、ラジウムから生じる気体エマナチオンが医学作用を及ぼすことも提唱された。こうして痛風、神経痛、心臓及び血管の疾患などがエマナチオンの適用症となり、ラジウム・エマナチオン療法は大流行した。

1913～21頃には日本各地でラジウムが購入され、外用療法が盛んにおこなわれた。しかし、日本国内でのラジウム保有量は少なく、1934年に東郷平八郎ががんに罹患した時、全国から集められたラジウムは1.03gであったという。世界でラジウムによる治療が進む中、遅れをとっていた日本の医療界に朗報をもたらしたのが、三井報恩会のラジウム購入のための寄附であった。

ナイガイ100年の歴史に息づく ロータリークラブのサービス精神



株式会社ナイガイ 代表取締役社長
今泉 賢治

株式会社ナイガイは、2020(令和2)年8月31日に創立100周年を迎えました。若き2人の創業者の心を支え、経営の道を拓く礎となったのは、当社の創業にも深く関わった実業家・米山梅吉翁が日本に紹介した、ロータリークラブのサービス精神でした。



ニューヨークで出会った若き二人が 起業を決意

創業者の依田耕一と小林雅一は、共に1888(明治21)年に生まれました。依田は、明治海運2代目社長の依田治作の長男で、慶應義塾理財科を卒業後、1912(明治45)年にアメリカのイーストマン商業学校に入学しました。一方、山梨県の貧しい農家に生まれた小林はわずか12歳で上京し、昼間働きながら夜学に通い勉強にいそしみました。その後先輩の援助と自身の貯金をはたいて1908(明治41)年に渡米し、ここでも雑貨店に務めながら夜学に通った後、オハイオ北部大学の法科に入学を果たしました。

それぞれの学校を卒業した二人は、日本からの陶磁器を輸入するニューヨークの商社、モリムラブラザーズ(現森村商事)に入社しました。同僚として出会った依

田と小林は意気投合し、やがて日本で事業を興すことを計画します。最終的に靴下の製造業を選んだのは「平和産業であること」「世の中の人、誰にでもサービスできる事業たること」「将来性があること」という二人が描いたビジョンにぴたりだったからでした。

当社設立を陰で支援した 実業家・米山梅吉翁

当社の創立を語る際に忘れてはならない人物が、当時三井銀行常務で、後に三井信託株式会社(現三井住友信託銀行)を設立し、貴族院議員等も務めた米山梅吉翁です。依田と米山翁は遠縁の親戚にあたり、学生時代の依田に海外留学を勧めたのは米山翁でした。また依田がモリムラブラザーズ時代に、政府派遣財政経済委員として渡米した米山翁を、小林に紹介しました。こうした縁もあって、1918(大正7)年に帰国した

依田、1919(大正8)年に帰国した小林は、靴下製造会社設立の計画を持って、米山翁のもとを相談に訪れます。すると米山翁は「今の青年が、たいがい大会社や銀行に就職するも



創業者 依田耕一



創業者 小林雅一



創業時の愛知県愛知郡御器所村に建設した名古屋工場

の多いなかに、君たち二人が小さいながらも自分たちの力で事業を始めるということは、もろ手を挙げて大賛成だ」と喜び、二人を激励しました。それから米山翁は、仕事の立場上、表に立つことはありませんでしたが、当社の経営に対して、陰ながら親身になってさまざまな指導と援助を行いました。

時代を超えて受け継がれる 4つのサービス精神

会社設立にあたり、まだ32歳と社会経験の浅い二人の創業者は、自分たちのやりたいことをどう表現し、どのように世の中に伝えたら良いのか悩みました。そのとき、経営の指針を定める際の礎となったのが、“自分の職業を通じて奉仕する”というロータリークラブの4つのサービス精神「正直」「公正」「善意」「有益」でした。ちょうどこの頃、米山翁が中心となって東京ロータリークラブ発足に向けて奔走しており、その動きを間近で見ていた依田と小林もその精神に感銘を受けていました。こうして、“世界の良心の声”と言われるサービス精神に基づく「4つのテスト」は、当社の心構えのバックボーンとなりました。その後、依田と小林もロータリークラブに入会し、特に小林は熱心に活動に参加するようになります。東京ロータリークラブは、太平洋戦争で一時解散状態となりましたが、1946（昭和21）年に亡くなった米山翁の遺志を引き継ぎ、1949（昭和24）年に小林が会長となって活動を再開しました。その後も小林は、名古屋や川越、秋田など各地のロータリークラブ設立に尽力し、1958（昭和33）年には国際ロータリー第1副会長の要職に就任するなど精力的に活動して、その発展に力を尽くしました。ロータリークラブの行動基準としての4つのテストの中でも「みんなのためになるかどうか」が靴下づくりの大きな方針となりました。強く、履き心地が良く、しかも価格が合理的な商品を提供して、世界中の人々にサービスすることを目指したのです。また、靴下づくりにおいて3つの標語（3-BLE）も掲げました。Durable（耐久性のあること）Comfortable（履き心地の良いこと）Reasonable（合理的な価格であること）3-BLEの商品は、良い商品を作ることになります。丈夫で履き心地が良く、外観の良い商品で、価格もそれに相応しく、さらに美しい商品を作ることがナイガイの物づくりのモットーであり、自分の職業を通して奉仕することに繋がるとしたのです。こうして、二人の創業者に大きな影響を与えたロータリークラブの精神は、100年の長い

時を経て、現在でも社是（経営の基本主張）に反映され、当社の企業DNAのなかにしっかりと息づいています。

伝統を守りながら次の100年へ たゆみなく挑戦を続ける

当社の設立からこれまでの100年間の歴史には、さまざまな紆余曲折があり、時には会社の存続にかかわる危機的な状況もありました。それらを乗り越えて今があるわけですが、100周年にあたり、全社員に向けたメッセージとして「不易流行」という言葉を贈りました。その意味は、“こたわらなくてはいけない大切なものに関しては、徹底的に守る。しかし、変えなければいけないことに関しては、過去のしがらみを捨ててすぐに変えよう”ということです。ナイガイにとって守り続けなくてはならない不易は「信用」と「品質」、変えなくてはならない流行は「考え方」と「行動」です。変化の激しい現代社会は、企業に対して常に新しい役割と存在価値を求めています。創業の理念を常に意識しながら、次の100年に向かってナイガイの存在意義を問い直すと共に、絶え間ない革新を繰り返し、世界中の人に愛され信頼されるモノ・コト創造企業をめざして、たゆみない挑戦を続けてまいります。



ロータリークラブ創始者ポール・ハリス来日時写真
後列右側が小林、前列左二人目が米山翁（1935年）。



東京ロータリークラブのチャーター伝達式
ミーネズから小林雅一会長に手渡された。
式には吉田茂首相も出席した（1949年）。

明治四十四年の夏、まだ私が慶應の学生であった頃ですが、帰省した時に、郷里の関係で米山翁とは遠縁に当って居りましたので、卒業後の方針等について御話しを伺いに上った事が御座います。

その当時は、丁度就職難の時代で、翁の御話しによれば、大学出の秀才が満場喝采のもとに憧れの三井銀行等に就職しても、一年とたたない内に銀行の様なルーテン・ワーク（きまりきった仕事）には、秀才も凡化する様な状態だから、狭い国内で就職運動などするよりも、むしろ、此際海外に出て大いに視野を広めた方が将来の活動源泉の糧ともなるだらうと云う様な御話しを聞かされ、海外行きをすすめられたのであります。

私もこの事は卒業後の三ツの方針の一つに考えて居りましたので、翁の御言葉に非常に感銘し、早速海外渡航を決意すると共に、学校を卒業すると同時に渡米致したのであります。

先輩にも色々相談したのですが、仲々決定的な意見を聞かせてくれる人の少ない時に、翁からこの御教示を受けた事は私の生涯を通じ忘れられない肝銘の一つであります。

米国での学校の修業を終えて、ニューヨークの森村組に勤務中、偶々日本から経済使節団の一行がアメリカに來られたのですが、丁度米山翁もその一員であられましたので、久し振りに御目にかかりました。その際、翁は私に「君もアメリカ滞在は大分長い様だが、そろそろ帰国したらどうだ」との御話しがあり、自分も考えて居た事でもありましたので、早速小林君とも相談して大正八年に帰朝し、内外編物設立の計画をもって御相談に参りました処、翁の申されるに「今時の青年が大抵大会社や銀行に就職希望するものの多い世の中に、君達二人が小さいながらも自分達の力で事業を始めると云う事は双手を挙げて大賛成だ」と大変喜んで御賛成下され、激励の御言葉をいただきました。それからと云うものは御自身の仕事の関係上、肩書こそ出されませんが、事実上の社長として会社の性格を見極めて下され、陰に陽に大小となく事業の上に御注意をいたさんと共に、或時は戒められ、或時は賞揚される等、常に親身の御指導と積極的な御援助を下された事は、一般的に消極的な金融界に生い立たれた実業家としては真に異数の事でありまして、私共は衷心より敬慕致し

て居る次第で御座います。

又財界に於ける翁の信望は極めて厚く、曾って私が会社の増資の時に、父の紹介状で馬越恭平翁のところへ伺いました処、馬越翁は自分等が製造工業を始めた事について大変賛成して下され、御快諾を得たのでありますが、その時「米山さんは私の最も信頼している人物で、若し米山さんから電話一本いただければ株式全部を御引受けしてもよろしい」と申された位で、此の一言でも翁が如何に財界人の信頼が厚かったかを物語るものと思って居ります。

翁は常に私共に対し、事業の経営については細かい処まで御指導下さいましたが、唯一金儲の仕事については金融界の重鎮で諸種の実情に通じて居られながら、一言も聞かされた事はありませんでした。

当時の日本は、丁度過渡的な時代で金儲主義の事業家が跋扈して浮沈の激しい世相でしたが、先見の明ある翁は若い私共をよくリード下され、徒に利慾に走らず、只管事業に専心する様に常に御指導を受けて居りましたので、私共の肝に銘じて今日迄この精神が動脈となり、終始一貫、仕事本位に事業を安泰に続けて参ることが出来たのであります。種々な関係から、米山翁の様な明治の生める最も高邁な人格者にして且つ国際的経済人として立派なる指導者の知遇を受けたと云う事は、吾々の仕事の此の四十年史の骨髓ともなり、今にして思えばつくづく有難い御教示を受けたものと感謝致して居ります。

以上申上げました様に、米山翁の人格は直接吾社の社格の真髓となり、世間から兎角、好評を受けて居りますのも一つに翁の人格によつての御蔭であると確く信じて居ります。翁は戦争末期に健康を害され、病院にて何かと御不自由な生活を送られたのでありますが、全く御気の毒な事で御座いました。幸い私共は終始接する事が出来ましたので、及ばずながら最後まで御身辺の御世話をして御慰め申上げ、又御病氣中、小さな穢い自動車でしたが、多少なりとも御用をつとめ得ました事をせめてもの幸と存じて居ります。

今日吾社が、創業四十年を迎えるに当たりまして今若し翁が御存命ならば、どれ程か御喜びいただけるものと思うにつけ残念ですが、事業も此の様に順調に伸展致して居りますことを霊前に御報告出来ます事を此の上もない喜びと存じて居ります。

大正六年、目賀田種太郎男爵を長とする日本政府の財政経済委員の一団が米国に派遣されました。その時、米山さんは委員としてニューヨークへお出になりました。私もあちらにいましたので、依田さんの紹介により、はじめてお目に懸りました。

大正十三年、私は名古屋で仕事をはじめ、万代さんのお世話になっておりました頃、米山さんが来られて、ロータリークラブを作られました。まずロータリーの由来を述べてから現況を語り、創立委員を選ばれたが、一流人ばかりを揃えられました。先代の伊藤治郎右衛門さんを長とし、鈴木ヴァイオリン社長さんや、上遠野さんなどが中心になられました。これには、万代さんの一方ならぬお骨折りがあったと思いますが、兎に角、立派なクラブができました。

いくら粒揃いの会員がいても、手足になって働く世話人がなければ、仕事が運びませんので幹事ということになり、私がその役を仰せつかりました。豊田利三郎さんは笑って「人に使われるばかりが能ではない」と言われましたが、私は甘んじて幹事をつとめました。そしたら、後になって「名古屋は金儲けばかりしたが、ロータリーという会は立派なものだ」とほめてくれる人も出てきました。

東京へ参りまして、また幹事を十三年間務めました。米山さんとはロータリーのことで往復が頻繁になり、逢う度毎に話はつきませんでした。米山さんは実に熱心で、軍部の注目を受けるようになりました。昭和十五年頃には集会にはいつも憲兵が聴講に来ました。だんだん圧迫がひどくなり、全国ロータリーの幹事をしていた芝染太郎さんは、憲兵隊に呼び出されて「シカゴと連絡したり、外人をクラブ員にする団体は許されない」と宣告され、「こんな会をやる者は非国民だ」とまで罵られたそうです。米山さんは呼び出されませんでしたが、この非国民の一言には、悲憤の涙を流され、忠君愛国の精神に於ては人後に落ちない自信に満ちている者が、こんな悪罵を受けてはもう続けられないと決心され解散するに至りました。解散に当たって二つの方法が考えら

れました。文字通り解散して、クラブの精神までも無くするか、名を変更して実を置くかというのです。これはいわゆる地下にもぐることになります。私共は後者を撰ぶことにして、名を水曜クラブと改め、従来通り会合しました。もちろん海外との連絡は断ちましたが、国内の同志はこれまでの慣例を守り、その精神を培い、根を張り、ひたすら時機の到来を待ちました。

昭和二十年米山さんは帝大病院から工業クラブの水曜クラブに出席され、これから三島に疎開するから暫くのお別れとなる旨の挨拶がありました。

昭和二十一年三月十一日私は三島に伺いましたら、コタツにおられましたが、同年四月二十八日長逝されました。

日本ロータリーは昭和二十四年三月復帰いたしましたが、戦前二千人の会員が戦後八年間に九千九百人（約一万）となり、クラブの数は二百五十に達しました。

顧みますれば、大正十一年に米山さんが欧米から帰朝され、廿年間に養われた種がここに実ったのであります。米山さんは「量より質」を標語として人選を厳にされたので、日本のロータリーは質がよいと世界的に名声を博しています。米山さんでなかったら、これだけの発達は得られなかったであらう。

二三年前から、米山さんの名を称えるために米山奨学金の募集を行い東京クラブだけで、東南亜の二人の留学生に奨学金を与えました。一人は印度の学生でありましたが、東京大学で水産学を勉強して博士号を得、他はタイの学生で、養蚕と製糸を研究し学士号をとって帰りました。この兩人は往復旅費、滞在学习費まで全額支給いたしました。

この結果により、今回は全国的なものとし、八名の学生に滞在中の学費として三百万円を支給する米山奨学金が設けられました。この事業により米山さんが、いつまでも記憶されることを希望いたします。

米山梅吉とラジウム

日本のがん医療への貢献

静岡県立静岡がんセンター
放射線・陽子線治療センター

西村 哲夫



1. はじめに

私はがんの放射線治療を専門とする医師です。2002年4月に静岡県駿東郡長泉町に開設された静岡県立静岡がんセンターに赴任しました。長泉町内にある米山梅吉記念館は通勤途中にあり、自然にその名前が目に入りました。しかし米山梅吉という方がロータリークラブの創始者ということは知りましたが、それ以上の関心を持ちませんでした。

一方日本のがんの放射線治療のパイオニアで国立がんセンターの総長を務めた塚本憲甫（つかもと・けんぽ：1904–1974）の生涯を描いた、「ガンと戦った昭和史 塚本憲甫と医師たち」という本¹⁾があります。日本の放射線治療の歴史をよく理解することができる本で、ずっと自分の書棚に置いていました。

放射線治療は外部照射と内部照射に分けられます。外部照射はX線や粒子線などの放射線を体の外から当てる方法です。一方内部照射はアイソトープ（放射性同位元素）を小さな金属内に密封して病巣に挿入や密着させる密封小線源療法（小線源治療ともいう）とアイソトープを内服または静脈注射して体内に投与する内用療法とがあります。

さて放射線治療の専門学会である日本放射線腫瘍学会には小線源治療部会という分科会があります。2014年に、この小線源治療部会学術大会で「小線源治療の今昔」というタイトルで講演することになりました。このため「ガンと戦った昭和史」を読み返してみたところ、その中に「米山梅吉」という名前を見つけました。塚本が勤務した癌研究会附属病院は、米山が理事長を務めた三井報恩会から1934年（昭和9年）に5gという大量のラジウムの寄付を受けていました。

これは日本の放射線治療の歴史の中で重要な出来事で、私も知っておりました。しかし寄付側である三井報恩会の理事長が米山であったことをその時初めて知りました。講演のために、参考となる資料があるかどうか知りたく、米山梅吉記念館にお邪魔しました。前置きが長くなりましたが、これがご縁で私がここに寄稿させていただくことになりました。

2. 放射線治療とラジウム²⁾

がんの放射線治療は1895年のレントゲンによるX線の発見と1898年のキュリー夫妻（ピエール・キュリー：1859–1906、マリー・キュリー：1867–1934）のラジウムの発見が起源となっています。レントゲンは1900年に、キュリー夫妻は1903年にそれぞれノーベル物理学賞を受賞しました。ラジウム発見の意義は新元素の発見とともにラジウムの出す放射線が医療などに与えた大きなインパクトのためとされています。

キュリー夫妻の発見したラジウム（正確に言うとラジウム226）は半減期1620年でアルファ線という放射線を出し、ラドン222という元素に壊変します。ちなみに壊変とは原子核が不安定な状態から、放射線を出して別の原子核に変わっていくことです。ラドン222はその後も壊変を続けて、最後に安定した元素になります。この間発生する放射線によってがん細胞を死滅させることになります。

キュリー夫妻の発見したラジウムは発見後まもなく医療に用いられるようになりました³⁾。わが国には1903年に東京帝国大学の物理学の教授である田中館愛橘（たなかだて・あいきつ：1856–1952）によって持ち込まれたという記録があります。そして1904年に東京大

学の内科教授の三浦謹之助（1864–1950）が胸部皮膚にラジウムを貼り付ける治療を行ったのが日本の最初と言われています。1911年には同じ東大皮膚科の教授土肥慶蔵（1866–1931）が治療を始めました。この頃から全国でも始まり、頭頸部や婦人科領域にも広がって行きました。また前述のラドンはエマナチオンと呼ばれ、飲用、吸入、浴用などの形で、通風、関節炎、神経痛等々様々な目的に用いられ、大正初期にはラジウムブームが起こったそうです³⁾。

小線源治療はアイソトープを針状、管状、あるいはシード状にして、がんの病巣に密着させる、またはがんの中に挿入する方法です。ラジウムは粉末で針や管などの形状をした容器に封入されます。写真はかつて浜松医科大学で使われていたラジウム針と保管庫です（図1、2）。これを何本も直接病巣に刺入し、がんの治療を行いました（図3）。

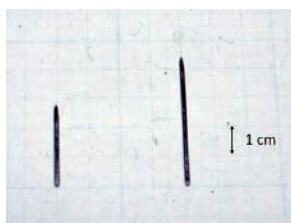


図1. ラジウム針の外観
線源の長さは44 mmと28 mm
で線源強度はそれぞれ1 mgと
0.5 mg



図2. ラジウム線源保管庫



側面写真



正面写真

図3. 舌がんに対するラジウム治療

ラジウム線源が井桁状に直接病巣に刺入されている。

小線源治療は病巣に直に放射線が照射されるために大きな効果を得ることができます。特に子宮頸がんや前立腺がんの放射線治療にはなくてはならない治療方法です。

現在がんの放射線治療はリニアックなどによる外部照射が主体となっています。放射線治療が始まってまだ間もない1930年頃は外部照射を行うX線治療装置はあったものの、そのエネルギーが低く体の内部の病巣まで十分な放射線が届かない状況でした。外照射が放射線治療装置として威力を発揮するのは、1950年代後半のテレコバルト装置、1960年代後半のリニアック（直線加速器）の登場を待つ必要がありました。このためラジウムには大きな期待がもたれました。

3. 癌研究会病院とラジウム²⁾

現在、日本の代表的ながん専門病院の一つである「がん研有明病院」の母体は1908年設立の「癌研究会」です。癌研究会の設立に当たっては、初代総裁に桂太郎首相、副総裁に渋沢栄一など当時の政財界の重鎮の名前が連なっています。1915年には病理学者でのちに東大総長になる長與又郎（ながよ・またお：1878–1941）が理事長に就任しました。

癌研究会は1918年に東京帝国大学内で診療を始めました。放射線治療は1922年にX線装置で診療が行われ、そして1929年に初めて50.5 mgのラジウムが購入されました。その後、長與らが奔走し1934年に東京都大塚に工費25万円で研究所と附属病院が作られました。附属病院はこの時徳富蘇峰（1863–1957）により康楽病院と名付けられました。

当時すでにラジウムはがん治療の大きな武器と認識されていましたが、癌研には100 mg、日本国内全部合わせても2 gしか保有がなかったそうです。しかしラジウムは非常に高価で当時1 gのラジウムの値段は20万円といわれていました。

長與はがん診療にラジウムが必要であることを説いていました。日本のラジウム治療は長與のいた東大で始まっており、その効果をよく認識していたと思われます。

長與の友人に帝国学士院長の桜井錠二（1858–1939）がいます⁴⁾。桜井は日本の化学界の重鎮で大きな功績のあった人です。桜井は三井報恩会の評議員を務めており、

長與の意見を聴いて賛同し、理事長の米山梅吉にラジウムの寄付を進言したところ、米山は直ちに快諾しました。

この時の三井報恩会からの寄付は100万円にのぼりラジウム5gが購入されました。このラジウムはベルギーから輸入されました。ラジウムの原石は当時ベルギー領であったコンゴで採掘されたからです。

これにより癌研康楽病院は世界でも有数のラジウム保有施設になりました。一方ラジウムの保管と使用のための新館も必要となり、こちらは他の助成団体からの10万円の寄付で1935年8月に竣工しています。病院の工費25万円と比べるとラジウムの100万円がいかに巨額であるかがわかります。

長與又郎の日記⁵⁾によると、1934年6月19日に長與は桜井を訪問し、米山が快諾した旨の報告を受けました。この日長與は日記に「至誠通天」と書いています。1935年1月21日長與は三井信託に米山を訪問しました。お礼を述べたものと思われます。その後1937年6月17日工業倶楽部において、癌研究会は晚餐会を催し、米山ら創立以来の功労者を招きました。このように、長與自身は2度米山に面談をした記録を日記に残しています。

4. 三井報恩会の設立の背景

三井報恩会は1934年3月に三井家からの3000万円の出資で財団法人として発足しました。これには当時の社会情勢を知る必要があります。1929年の世界恐慌、1931年の満州事変、1932年2月の血盟団事件、5月の五・一五事件など世の中が不安定になり、この間既成の政党や財閥が批判の対象になって行きます。

特に血盟団事件では三井合名の理事長であった団琢磨がテロのため殺害されています。このような状況から財閥に対する批判をかわすために三井報恩会が設立されたといわれています。

三井報恩会は1934年4月23日に評議員会を開き米山が理事長に選任されています⁶⁾。そして5月1日に事務を開始し、6月28日に2回目の評議員会を開催しました。この時決まった初年度の助成事業の内訳は社会事業助成376件559,028円、文化事業助成91件362,250円、特別事業助成1件としてラジウム購入寄付996,695円、合計468件、総額1,920,973円でした。ラジウムの寄付は金額の事業全体の半分を越しており、

大きな期待を受けていたことが推測されます。

ここで日付を振り返ると、米山が桜井の進言を受けて、ラジウムの寄付を決断したのは評議委員会開催の9日前のことでした。このことから米山の強い指導力がうかがわれます。米山は就任してから、1944年9月の理事長退任まで全部で3,922項目、17,535,966円を決裁したとの記録があります。ラジウムの寄付はその最初の事業でした。

5. ラジウムの活用²⁾

癌研病院のラジウムは早速活用されています。最初の放射線科長は山川保城（やまかわ・ほじょう：？-1941）です。山川は早くも1938年には「ラジウム療法の実際」という著書を発表しています。しかし山川は1941年に脳出血で亡くなりました。山川の後を引き継いだ塚本憲甫も精力的に仕事を行っています。

しかし癌研康楽病院は1945年4月の大空襲で焼失しました。このため癌研究会は解散しました。この時、貴重なラジウム線源は日本銀行の金庫などに退避されており無事でした。

しかし癌研究会は再び組織されて、銀座にあった南胃腸病院を買収して1946年9月診療を再開しました。その後ラジウム治療は盛んにおこなわれ、最も多い年には1年で4000件の治療が行われています⁷⁾。その後1954年癌研病院はもとあった大塚の地に再建されました。

塚本は後に1957年の日本医学放射線学会総会で宿題報告「悪性腫瘍の放射線療法に関する経験」を発表し、がんは放射線治療で治すことができる病気であることを示しました。それまでは放射線治療の対象は、結核などのがん以外疾患にも数多く行われていたのですが、がんの放射線治療の成績が示されたことは大きなインパクトがありました。

塚本の報告を見ると、多くの疾患にラジウムが用いられていますが、特に喉頭がんのラジウム埋没療法は有名です⁸⁾。英国で始まったラジウム埋没療法は皮膚と軟骨を切開して喉頭がんの病巣にラジウム線源を置くものでしたが、喉頭の壊死が多いのが問題点でした。塚本はこれを改良して、軟骨を取らずに軟骨の外側に線源を置き、有害事象を低減しました。これにより当時は外照射では治癒困難で、切除を受けるしかなかった喉頭がん患者が声を失わずに治癒することが可能と

なることが示されました。当時としては画期的な成果です。これらの成果はいずれも三井報恩会から寄付を受けたラジウムを用いた成果でした。

癌研病院は1962年に国立がんセンター（現在の国立がん研究センター中央病院）や1964年に愛知県がんセンターなどができるまで国内唯一のがん専門病院でした。その中で行われた放射線治療でラジウムが大きな役割を果たしたことは言うまでもありません。

しかし1960年代になって、テレコバルトやその後のリニアックの登場により、がんの放射線治療の主役は、外照射装置に変わりました。またラジウムを用いた小線源治療もラジウム線源の持つ特性から、医療従事者の放射線被ばくがあること、線源を封入した白金の容器から放射線の漏洩があり管理が難しいことが問題点として挙げられました。1981年に国際放射線防護委員会（ICRP）はラジウムの使用を止めて他の新しい線源に移行することを勧めました。

このため全国でもラジウムをセシウムやイリジウムなどの新しい線源に切り替えました。癌研病院のラジウム線源は1989年に全量廃棄され、その役割を終えました。現在の密封小線源治療は、遠隔操作で線源を病巣に挿入するリモートアフターローディング装置(図4, 5)

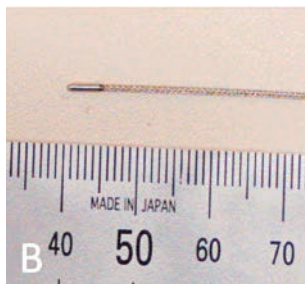


図4. 現在使われている遠隔操作式の小線源治療装置

A. 治療装置本体

B. イリジウム線源(模擬線源)、直径は0.9mm

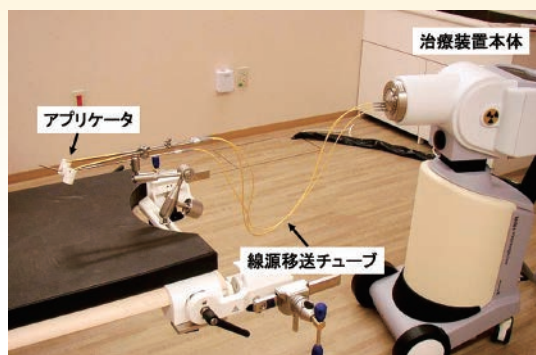


図5. 遠隔操作式の小線源治療装置の仕組み

病巣に挿入された器具（アプリケータ）には線源移送チューブを通して、治療装置本体にある線源が遠隔操作で送り込まれる。

や前立腺がんの組織内照射におけるヨウ素 125 シード線源が用いられて、医療従事者は被ばくすることがなく治療を行うことができました。

ラジウム治療は1934年に癌研病院に導入された際は、間違いなく最先端の医療技術でした。しかしどんな先端技術も一定の時間がたつと最先端ではなくなります。1898年の発見から数えても1981年のICRPの勧告まで100年足らずで役割を終えました。

しかしラジウムという名前は、海外では今なお多くの病院や研究所、学会の名前に用いられています。また小線源治療は別の核種を使って発展を続けています。

今回ラジウムの寄付に関する米山自身の記録を見つけることはできませんでした。しかし様々な資料を紐解くと、米山自身がラジウムに対して、大きな期待を持ち寄付を決断したことが分かりました。日本の放射線治療の発展の歴史において、ラジウムの果たした役割は極めて大きいものがあります。この点において米山梅吉の貢献があったことを記録に留めたいと考えます。

《参考文献》

1. 塚本哲也. ガンと戦った昭和史 塚本憲甫と医師たち 上下. 文芸春秋社、1986、東京.
2. 尾内能夫. ラジウム物語 放射線とがん治療. 日本出版サービス、1998、東京.
3. 稲本一夫. 初期のラジウム利用の歴史. 放射線医学物理 18:137-145、1998.
4. 若林文高. 国立科学博物館所蔵の桜井錠二資料. 国立科学博物館研究報告 E 類(理工学) 33:21-35、2010.
5. 小高健編. 長與又郎日記：近代化を推進した医学者の記録 上下. 学会出版センター、2001、東京.
6. 財団法人三井報恩会. 昭和9年度事業報告. 米山梅吉記 念館所蔵.
7. 山下孝他. 癌研究会付属病院55年間のラジウム治療の経験と40年間のラドンシードの制作販売. 臨床放射線 43:995-1000、1998.
8. 西村哲夫他. かつて我が国で行われていた喉頭癌のラジウム線源埋没療法 ある患者の自叙伝を通して. 臨床放射線 65:1051-1056、2020.

長與又郎(1878-1941)は東京帝国大学総長を務め、癌研究所や日本癌学会を設立した病理学者で、癌研究の世界的権威である。夏目漱石の主治医でもあり、漱石の逝去の際には、鏡子未亡人の希望で遺体解剖も行っている。長與は明治25(1892)年から日記¹⁾をつけ始めた。長與の日記を通して、三井報恩会が昭和9(1934)年に癌研究所にラジウム購入の費用となる100万円を寄付した経緯をみてみたい。

1900年代にはいり、世界各国で国際的研究課題となった癌研究への機関創設の必要性が日本でも議論となった。当時、欧米ではX線やラジウムの発見により癌治療の研究が始まっていたが、日本はまだ遅れをとっていた。しかし、国際癌研究協議会からも日本での研究会の開設と国際組織への参加要請があった。こうして明治41(1908)年4月2日、癌研究会の発会式が東京帝国大学医科大学病理学教室で行われた。会の設立要旨には「世界を通じて惨毒を流すこと甚だしき疾病は結核を以て最とし、之に次ぐは梅毒及び癌」²⁾とあり「癌は目下最重要なる国際的研究問題に属す」と記されていた。癌研究会の初代総裁には桂太郎、副総裁には渋沢栄一が就任した。

明治43(1910)年、長與は同会の理事になる。大正4(1915)年赤痢菌の発見で知られる志賀潔が理事長を辞任し、その後任として長與が理事長に就任した。大正7(1918)年、実業家森村開作が監事になる。開作の父六代目森村市左衛門は、傳染病研究所創設にあたり北里柴三郎を援助した。また輸出商社森村ブラザーズを設立。ニューヨークで活躍した。昭和3年に家督を継いだ開作は七代目市左衛門になった。ちなみに森村は東京ロータリークラブのメンバーでもあり、昭和14(1939)年70区のカバナーも務めている。傳染病研究所技師会の記録によると、大正8(1919)年12月「癌の研究を開始」とあり、この頃から本格的に癌治療の研究が始まった。

【大正十年二月二十二日】

夜、工業倶楽部に癌研究会理事会を開き、Radium Emanation Behandlung (Duane法)*を開始するに就いて協議す。(後略)

*ラジウム・エマナチオン療法

【昭和三年四月二十七日】ジュネーブ

十時聯盟本部にRjchmanを訪れ同氏紹介にてCancer Subcommitteeに列席す。議長Sir George Buchananなり。蘭のJitta、伊のLubrario氏外数氏あり。問題は・職業の癌発生に関する調査・ラジウム使

用方法の調査・体質と癌の研究等である。

昭和3年、国際聯盟主催の衛生会議、癩予防会議、万国癌研究会議などに出席するため長與はヨーロッパに渡った。4月27日、国際聯盟本部で保健機構理事長のライヒマンと会談した。夜にはライヒマンの自宅に招かれ「聯盟と日本との関係に就て、重要な話を交換し」ている。

昭和4(1929)年4月、長與は癌研究会会頭に就任。当時結核ほどは重視されていなかった癌治療に対し力をいれていく。同会は、同年4月、ドイツ留学中の中泉正徳(のちの東京帝国大学放射線科教授)に依頼し三菱商事を経てラジウム50.5 mgを8,938円73銭で購入した。同年5月、癌研究会前会頭本多氏の夫人から7 mgの寄付を受け57.5 mgを保有することになったが、諸外国に比べるとまだまだ少ない量であった。同年12月、癌研究会の理事会が開かれ、癌研究所の建設計画についての協議がなされた。

【昭和五年二月三日】

四時、偕楽園に癌研究会理事会を開き、土地、寄附等に付、打合わす。終って五時より医学記者諸君の招待会を開く。

この招待会で長與は「かように欧米各国共に癌研究の勃興した原因は第一、欧米各国共に癌の死亡率が高く一般に恐れられてきたこと、第二、絶対に不治といわれた癌の治療ならびに予防方法の見込みができたこと、等が主なもので、今や癌の研究は国際的一大競争の觀を呈しているが、ひとり我が国のみは少し立ち遅れているように思われる。(中略)なお各国の癌研究所においてはX線のほかに多量のラジウムを所有し相当効果を挙げているので、本会においての適当量のラジウムを購入したいと考えている。」と説明している。

長與は、昭和5(1930)年9月に病に倒れ絶対安静の宣告を受けた。自身の治療を続けながらも、癌研究会会頭としての責務を果たすべくことに当たった。「余の今後の研究の対象は癌である」と語り、他の要職就任も固辞し、癌研究の基盤作りに力を注いだ。

癌研究所創設

癌治療を本格的に開始するにあたり、専門施設の建設が課題となった。

【昭和七年三月三日】

宮川博士及び市川氏と共に癌研候補地三ヶ所(英国大使館裏、大塚〔空白〕)を巡視す。大塚家庭学校の敷地は最も適当なり。

【昭和七年三月十日】

(前略)土地購入は、過日視察せる大塚家庭学校の約二千坪は総て賛成なれば之に決し、価格は三井信託に一任のこととす。

【昭和七年四月七日】

三井信託より回答あり。家庭学校の土地は坪当り四十六円を至当とすとのことなり。依って之に決定。全二千坪を譲り受けることを決す。

昭和7(1932)年6月、癌研究所建設の土地を確保。同年11月1日の日記によると、名古屋ロータリークラブで「癌は不治の病に非ず、近年の研究原因が分り本態明らかとなる、対策、治療術の進歩(外科、X線、Ra)、早期診断等曙光見ゆ(後略)」と語り、今後癌研究会は地方へも進出したい、と挨拶している。こうして昭和7年9月に工事がはじまり、昭和9(1934)年4月、研究所・病院が完成した。延床面積約961坪、総工費は約27万円であった。

ラジウム購入

【昭和九年六月十九日】ラヂウム購入の見込つく

三時半、櫻井錠二博士訪う。今朝電話にて打合わせたるなり。要件は実に意外の福音にして、厚く感謝の意を表し対談三十分余にして辞去す。

櫻井氏との談話

櫻井博士は、自分は先般の癌研開所開院式に於て、研究所の歴史・機構・事業方針等を始めて精確に認識し、且つ君の書いたパンフレット類を読み、癌種に対する社会の大きな後援の必要あることを痛感す、三井報恩会の代表者米山梅吉氏に之を語り、ラヂウム二・三瓦の購入の必要を力説せる所、米山氏は言下にそは極めて適切な仕事なり、大いに考慮すべしと述べたり、三井報恩会の医学方面の評議員は佐藤三吉、林春雄の両氏なり、佐藤氏には自ら訪問して既に賛同を得、林氏にも近々面会の積りなり、事情斯くの如くなるを以て、ラヂウム購入は極めて有望なり、但し今年度は既に三分一を経過せるを以て、来年度になるやも知れず、また購入ラヂウムは三井報恩会の物品とし、之が使用を癌研に依嘱することとなるやも知れず、云々。余は櫻井博士が余の畢生の事業として多年苦心せし癌研に対し、斯く迄の厚意を寄せられたるを謝し、その志のみにしても余は満足す、またラヂウムは一時に二瓦の如き大量を持つこととせず、五〇〇ミリ又は一瓦ずつ順次に購入しても充分なること、購入するとしても果して一会社に所有の量を所持しおるや否も不明、之等を

充分調査の上、改めて援助を乞うこととすべし、云々。之にて辞去したり。恐らくラヂウム大量の購入は斯くして早晚実現せらるることとなるべし。帰途車中色々と考えた。至誠通天

化学者の櫻井錠二(1858-1939)は、理化学研究所創設にも尽力し帝国学士院院長も務め、三井報恩会の評議員でもあった。学術研究会議総会にて長与と対立したこともあったが、ラジウム購入に関しては自ら米山に進言し、米山もこれに同意した。まさに関係者の祈りが通じたともいうべきか。この後、ラジウム購入の手続きが、善は急げとばかりに進められていく。

【昭和九年六月二十五日】

この日、山上御殿にて櫻井錠二博士より、三井報恩会にて癌の爲め百万を支出することは理事会にて既に決定し、近々評議会にかかる筈の由、既に決定も同然なり。Radiumは1 gr.二十五万円位に低価せし由、2 grを五十万円にて購入して癌研に寄附し、他の五十万は癌研究寄金にし、学術振興会にて預かることとせば、最も宜しからんと提案せしに、ほぼ同意を得たり。評議員の一人林博士も会談に加わる。之に賛し評議会に於て之を提唱すべしと決す。

【昭和九年七月十一日】

十一時半櫻井先生を訪い、ラヂウム百万円購入の場合、その購入方法中最良と思われるものは、横浜白耳義*名誉領事の手を経てRa.Sulfat**を購入することにあること、価額が案外低廉にて約十八万余円にて一瓦を購入し得ること、四瓦を購入する場合のTube, Cell, Needle等の型及びその容量を如何なるものとすべきやに就て、過日米山川博士に調査せしめ置きたる表を示し説明す。(中略)先生は我が事のように悦ばれ、余も亦十年後の理想が先生の好意によって、急転直下研究所落成二月を出ずして決定すること感激に堪えざる旨を述べて辞去した。

*ベルギー **塩化ラジウム

【昭和九年七月十七日】

八時半、澁澤敬三子(爵)来る。ラヂウムの大量寄贈を受くることとなりたるに付、完全なる設備を有する治療別館を新設の必要あり。六七万円程度にて之を至急建設することを決す。(後略)

【昭和九年七月二十五日】

一時、櫻井学士院長をその自邸に訪い、本日午前三井報恩会理事会に於て、最終の決定の報あり、午後

四時よりは癌研理事会を開催するに付、その前之を報告し且つ、更めて謝意を表する旨を述べたり。

櫻井博士、自分も実に嬉しい、貴下の書いた種々の印刷物を見て、癌が医学上の最難問題たること、癌研が之を史的に見て献身的な涙ぐましい努力を続けて来たことに動かされ、ラジウムの大量購入の必要を痛感し、報恩会こそ之を為すに適当な機関なりと考え尽力せる次第なりと、始めて縷々と陳述せられたり。

余は、科学界に身を投じ三十余年の生活に於て、恙虫病の病原体確定の時と共に、今回の癌研への御好意最大の満足喜悦なりと述べて辞す。

癌研に於て横浜の白耳義名誉領事ロンポー氏の来訪を受け、ラジウム購入に関し種々の要点を談合す。

昭和9(1934)年5月20日、癌研究所および附属康楽病院開所。7月25日 三井報恩会よりラジウム寄贈の内達、8月7日三井報恩会よりラジウム5000mgおよび付属器具一式(約100万円)寄贈の正式通達があった。11月16日、ラジウム元素5014.73mg全量入手完了した。

昭和9年4月に設立された三井報恩会は、社会文化事業の助成を大きな目的に掲げた。この三井報恩会設立にあたって池田成彬や米山が白羽の矢をたてたのが、後に三井不動産会長となった江戸英雄であった。江戸は自身が語るように「性格上、中途半端なことはできない」性分で、三井報恩会設立時に内務省との折衝、寄付行為の作成など手続きをこなし、三井合名が寄附した国債と株式併せて三千万円を風呂敷に包み、米山に手渡した。こうして設立された三井報恩会初代理事長に就任した米山は、癌研究会付属病院にラジウム購入資金として百万円を寄付した。そして、ベルギー領コンゴの会社からラジウムを購入した。三井報恩会発行資料第一号によると「ベルギーでは産地コンゴよりラジウムの数千万倍もある原鉱を取り寄せ、アントワープに近いオーレンの工場にて精製し、之を世界に供給」していた。当時の三井物産ロンドン支店勤務の田代茂樹氏が、購入手続きに当たった。のちに江戸は「日本の敗戦によって三井報恩会の資産である国債も株式もゼロになってしまった。寄付した財産もほとんどなくなって、このラジウムは唯一の財産である。しかし、私は塚本博士*を生み、多くの患者を治したことだけでも、三井報恩会が残した社会福祉に大きな意義を感じるのである」³⁾と回顧している。これにより日本は、アメリカ、フランス、スウェーデンに次いで世界第四位のラジウム保有国になった。昭和9年7

月4日、ラジウムの発見者マリー・キュリー夫人が亡くなったが、この訃報と三井報恩会のラジウム寄贈の朗報が重なり、大きく報道された。

*塚本憲甫：癌研究会附属病院部長、のちの国立がんセンター総長

【昭和十年一月二十一日】

午後二時半、約により三井信託に於て米山梅吉氏と会見。同氏より癌研へラジウム寄附(報恩会より)に附帯して新館の建築を必要を生じたるに就ては、報恩会に於て相当考慮するの可なるを考慮中なり。積善会より十萬円の寄附ありし由なるも、尚五六万必要なる旨を私信にて余より米山氏へ送ることとし、之に基づきて報恩会理事会に諮ることとなる。

ラジウム照射の為の新館建設費は、原田積善会から十萬円、三井報恩会から五萬九千円の補足寄付を得て、昭和9年12月に地鎮祭が行われている。昭和10(1935)年8月、ラジウム研究および治療用建物の工事が竣工。11月に三井報恩会その他の関係者が招かれて設備観覧招待会が開かれている。いよいよラジウム治療が本格的に始まる。

【昭和十二年六月十七日】

四時、工業倶楽部。癌研究会理事会、評議会に次いで晚餐会を開き、創立以来今日に至るまでの功労者中の主なる人々を招待、感謝の挨拶を為す。串田氏謝辞を述ぶ。

三菱代表 串田、青木 三井代表 米山、山口 原田積善会 佐伯(久田欠) 生命保険会社協会代表 藤田、玉木 その他癌研幹事理事評議員約三十名 關谷貞三郎(恩寵金関係)

中根事務官(総裁宮家より)(後略)。

昭和12(1937)年6月、軌道にのった癌治療の研究と診療に功績のあった後援者が日本工業倶楽部に招かれた。(市川真理)

《参考文献》

1. 小高健編、長與又郎日記：近代化を推進した医学者の記録 上下、学会出版センター 2001 2. 癌研究会七十五年史編纂委員会、癌研究会七十五年史、財団法人癌研究会 1989 3. 江戸英雄、私の三井昭和史、東洋経済新報社 1986 4. 日本経済新聞社編、私の履歴書 日本経済新聞社 1992 5. 若林文高、国立科学博物館所蔵の桜井鉦二資料、国立科学博物館研究報告 E類(理工学) 33:21-35, 2010. 6. 塚本哲也、ガンと戦った昭和史 塚本憲甫と医師たち 上下、文芸春秋社 1986

《表紙の写真》

1. 上山明博、ニッポン天才伝 朝日新聞社 2007 2. 小高健編、長與又郎日記 学会出版センター 2001 3. 癌研究会七十五年史編纂委員会、癌研究会七十五年史、財団法人癌研究会 1989

米山梅吉・はる夫妻とつながる 幼き日の思い出

天野 昌子

大正12年11月、関東大震災のお見舞いとして、アメリカの材木王グリグス夫妻が来日しました。グリグス夫妻は女子教育の視察を希望し、実践女学校の高学年に在籍していた私の母はご挨拶を述べる機会を得ました。この英語でのご挨拶にグリグス夫妻は感心し、子供がいなかった夫妻は、この女子をわが子のように育てたいと熱望しました。母自身も留学に抵抗がなく、周囲の理解も得られたので、アメリカ東部ペンシルベニア州にあったペンホール大学への留学が決まりました。母はアメリカで五年間学び、帰国しました。一方、私の父はコロンビア大学に留学し、青年時代をアメリカで過ごしました。偶然にも日本からアメリカへ行く船は母と同じ船でした。

そんな両親のもとに生まれた私たち姉妹と弟は、緑岡幼稚園の一期生と二期生そして四期生として入園しました。なぜ、両親が緑岡幼稚園を選んだのか、今では知る由もありませんが、私の祖父は米山様より三歳年下の明治四年生まれであり、沼津中学校の後輩でもありました。その後、米山様と交流があったと考えられます。祖父が父へ幼児教育（特に情操教育）の重要性を説く米山様、そして緑岡幼稚園を紹介したと推察されます。また母は、アメリカ生活の中でキリスト教に感銘を受けて過ごし、その教育方針に賛同しており、両親ともに外国との繋がりがあったことなどの巡り合わせが、私たちを緑岡幼稚園へと導いてくれたのではないかと思います。

幼稚園時代、我が家は目黒に住んでいました。東横線、山手線のどちらでも通えたので、私たちは電車通園そして通学をしていました。私と二つ離れた弟はまだ小さかったので、通園には女中さんが付き添っていました。女中さんは、日中控室で編み物などをして待っていて、授業が終わるとまた一緒に帰りました。そのころから山手線は混雑していました。一方東横線は、渋谷

谷駅が発発なので空いており、帰りは先頭車両で移り行く景色をみて電車通園の楽しさを味わいました。そして、宮益坂を登ったところに緑岡幼稚園はありました。緑岡幼稚園での生活は、とてもびやかで楽しいものでした。園長先生のはるさんは、子供からするとしっかりしたおばあちゃま、という感じでした。私たちはまだ幼く自分のことで精いっぱいだったので、こちらから声をかけることはありませんでしたが、写真を撮るときにはいつも中心にはるさんが座っていらっしゃいました。

緑岡幼稚園は、私が物心ついてはじめて外の世界に接した最初の思い出として、静かな平和な、温かい心のこもった小さな園として、心の中に生きています。

主任の田村先生は、小柄でいつも和服を着ていらっしゃいました。和服の先生は珍しく、そのお姿は幼い目にも印象深く残っています。ある日、アメリカに行かれたお土産に素晴らしい着せ替え人形のセットと絵本を姉がいただいてきました。それは当時の日本では手にすることのできないような、立派なものでした。幼い私は、ドキドキする気持ちで接したことを思い出します。先生が、園児の一人一人にこのようなお土産をくださるというきめの細やかなご指導をしてくださっていたことは、今になって考えれば、大変なご努力と愛情のたまものと深く感謝しております。

田村先生は絵画の制作に優れ、姉は感化を受け目覚めていく一方、私は柴田先生、指田先生のもと、音楽や体を動かす動的な楽しみを引き出していただきました。また一方、園で歌う讃美歌やお話しを通じて、幼いながら、小さくても目には見えない大きな大きな見守りの中で生きていくことを会得していったように思います。

幼稚園から小学校まで青山学院に通いましたが、小学校の最高学年の昭和19年8月、学童疎開で静岡県田方郡上狩野村の落合楼に行くことになりました。この機会を得たことは私にとって大きな転換となりました。

た。と言いますのは、一つ年上の姉は、読書や絵を描くことが好きで静かな優しい子供でした。それに引き替え私はお転婆娘で、なんでも先にやってしまうタイプでした。母はいつも「お姉さまが一番よ。あなたはその次なのよ」と言っていました。わかってはいるものの、いつも二番手でいることは私にとって少し不本意な感じがしていました。小学校6年で姉と離れて生活をしたことにより、姉の存在を意識しなくてもよくなり、自分の中で少し肩の荷が下りたような気がしました。

湯ヶ島では、地元の婦人会の方々が寮母さんとして、とても親身にお世話してくださいました。私たち5、6年生は男女別々の部屋で一部屋ずつでしたが、3、4年生は大部屋だった記憶があります。私はある程度大きくなっていましたので、疎開中ホームシックになることはなく、充実した日々を送っていました。

昭和19年秋にかなり大きな地震があり、温泉風呂の蛇口から出る湯の温度が熱くなりました。私たちは、各自湯たんぽを家から持ってきており、夜お風呂に入る時、温泉のお湯を蛇口から入れてお布団を温めました。温泉の成分によって、湯たんぽに穴が空いた事件もありました。

落合楼での半年間は、緊迫した戦争末期とは思えない恵まれた日常でした。昭和19年歳末には、皇太子（現在の上皇様）11歳の誕生日を祝って、皇后陛下よりお菓子をいただきました。そのお菓子には御歌が添えてありました。

つぎの世をセおうべき身ぞたくましく
ただしくのびよさとにうつりて

食糧難の時期にご配慮いただいたことに、子供ながら有難く思いました。



皇后陛下からいただいたお菓子と御歌



落合楼にて 前列左が筆者

年が明けて昭和20年1月頃、大雪が降り相当積もったのでしょう。その後、天気が回復すると勉強中に屋根瓦からドドドーっと雪が溶け滑り落ち、建物が地震のように揺れ、びっくり大騒ぎをしました。

学芸会の思い出として、確か外務大臣のお嬢さんが病気で一年留年し、私と同室になりました。私たちは、下級生のために劇を考えて上演することになりました。彼女は年の差以上にしっかりしていて、下級生に上手に接して教える様子に感心しました。私は「春日局」の奥方役をやることになりましたが、若い先生（結城清子先生だと思います）が素敵なお着物を貸してくださいました。うれしいやら恐縮やらでした。このように、いろいろな活動を自主的にやらせていただきました。授業は、畳の部屋に座って男女一緒に行われました。食べるものはお芋ばかりでした。先生は時々「おならをしたい人は廊下へ出なさい」なんておっしゃっていました。

昭和20年3月10日、6年生は東京に帰りました。未明に大空襲があったので、予定よりかなり遅れて東京に着きました。山の手は被災を逃れ、青山学院で解散し、各自自宅へ向かいました。私は渋谷駅のホームで電車を待っていると、防空頭巾をかぶった煤まみれの女の子が、ヤカン一つをもって乗ってきてびっくりしました。空襲の話は聞いていましたが、自分と同じような年ごろの子のその姿をみて、空襲が本当にあったんだと実感しました。

空襲が頻繁になり、卒業式も中止となりました。4月の新学期に向けて東京の家は他人に任せて、私たち一家は御殿場に移りました。落合楼にいた弟は5月に

迎えに行きました。5月25日には、目黒の家が焼けました。父は御殿場の12代続く名主でしたが、事業をおこして東京に生活していました。目黒の家がなくなったので、父の実家のある御殿場に生活が移りました。それまで車で通っていた学校も、御殿場では一里の道のりを歩いて通いました。ここで、私の生活は青山から大きく離れていきました。そのまま東京で中学、大学と進学した友人もいます。今、同窓会で会うことがあります。青山での思い出は私の中で宝物であり、

また生きる基本になっています。

月日は過ぎ、昭和53年から主人の会社のご縁で、横浜市鶴見区の家に定住しております。自宅前の道路を隔てた向かい側は、広大な総持寺の境内が繰り広げられています。平成27年主人が亡くなり、総持寺のお墓参りをするようになりました。主人の墓所の近くに米山梅吉様のお墓がありました。短形の広い墓地には褐色がかかった灰色の大きな墓石が建っています。表には「米山家之墓」裏には「昭和二年六月 米山梅吉建立」と彫ってあります。大正10年長男が急逝され、大正15年次男も亡くなった米山様がお子様達を偲んで建てられたものでしょうか。

なぜ、総持寺に建てられたのかわからないまま、主人のお墓参りに行くたびに、米山様のお墓の前でも手を合わせるようになりました。70年以上の時を経て、再び米山様に会ったような気がしました。

令和2年3月に、娘家族と一緒に落合楼に行きました。天城の峰から流れる二つの川の合流点からはじまる狩野川のすぐ際に作られた落合楼の部屋から眺めると、山々は遠く薄青色で静かな佇まいをみせ、吊り橋は昔と変わらず、渡った先に温泉プールがあって泳いだことを思い出しました。当主様からあれこれお話を伺い、文化財として残していただいていると聞き、有難く思いました。



落合楼当主と筆者

9月には御殿場に住む弟から、長泉に米山様の記念館があると聞いて記念館を訪れました。記念館は想像以上に広い敷地で、明るく親しみのある建物でした。あらためて米山様の面影を思い出し、私財を投じて世に尽くされたお姿に感銘を受けました。記念館の展示



緑岡幼稚園一期生
前列中央 米山はる園長、3列目右から5番目 米山梅吉
2列目左から5番目、白い服黒いリボンの洋服姿が筆者のお姉様

室で、はる園長が真ん中に座っている緑岡幼稚園一期生の写真を見つけました。姉は、真ん中の列左から5番目です。

昭和50年代後半のある日、姉から電話がありました。卒園して40年経っている青山学院緑岡幼稚園を青山学院幼稚園の前身とする運動をしているので、協力してほしいという内容でした。勿論、私は賛成しましたが、当時4人の子育てで多忙をきわめ会合には出席できず、原稿を送りました。そして、昭和58年に緑岡幼稚園の歴史をまとめた『青山学院緑岡幼稚園1937～1944』が完成しました。残念ながら姉はその2年後に他界しましたが、緑岡幼稚園、小学校、学童疎開の懐かしい思い出は、姉にとっても私にとっても大きな財産です。

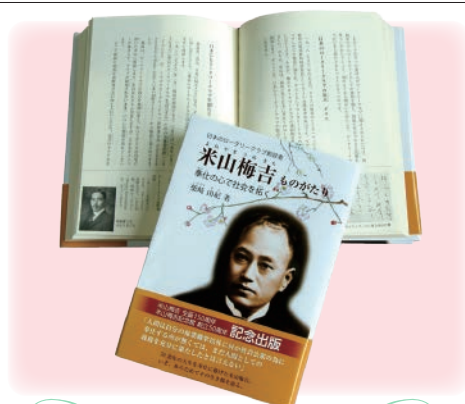
令和2年11月、暖かい日差しに誘われて、いつもより早く墓参にと家を出ました。米山家の墓地の前に自転車が止めてあり、背の高い男性が草を刈っていました。私が声をかけると、元ロータリークラブのメンバーとのこと。「天気が良いので掃除に来た」とおっしゃっていました。「米山さんがいなければ、日本のロータリーはなかった」と草刈りに精を出していらっしゃいました。草の根がはびこっていて作業が大変だと思いますが、その後何度かお掃除をしてくださり、見違えるように黒土が甦り、きれいな墓地になっていきました。12月末には墓石も洗い清められ、生花も供えられ、令和3年の新年を泉下の米山梅吉様は、さぞかし喜んでいらっしゃるかと嬉しく思っております。



『超我の人 米山梅吉の聲音』

創立 35 周年の記念出版。ロータリアン、教育者、社会奉仕者としての米山梅吉研究を集大成した最良の一冊。「米山梅吉の生涯や業績」「ロータリーとのかかわり」「記念館の歴史」など、詳細な解説がなされている。資料編には、講演、月報やラジオ放送なども掲載。館所蔵の図書目録、年表なども網羅されている。

(財)米山梅吉記念館編集・発行
B5 判 260 頁 2,500 円(税込)



『米山梅吉ものがたり』

生誕150年・(財)米山梅吉記念館創立50周年記念事業出版
明治、大正、昭和にわたる激動の日本に「奉仕の理想」を実現した人。我が国ロータリークラブの祖、社会への奉仕を生涯の信条とした、その根源が読み明かされる。

小・中学生から読める【伝記】ジュニアノンフィクションシリーズ
著者／柴崎由紀 令和元年7月 銀の鈴社発行
A5 判 280 頁 1,980 円(税込)



米山梅吉俳句集『藍壺俳句』

創立40周年事業として出版。米山自らが手がけた草稿をもとに、句会での作品、書簡に記されたものなどを加えて349句を一冊にまとめたもの。作句の時期や機会なども記し、その時々生活や人脈を垣間見ることがができる。

(財)米山梅吉記念館編集・発行
A5 判 76 頁 1,000 円(税込)



人物写真集『米山梅吉翁』

慶應に生まれ明治、大正・昭和を生き抜いた日本の偉人、米山梅吉の幼少から晩年までを網羅した写真集で、米山研究には欠かせない一冊。米山梅吉の遺品・愛用品などの内容別に数多くの写真が収録されている。

執筆・編集／米山聰 写真撮影・編集／大川孝昭
特製布張り装丁 ケース付き 平成9年4月発行
B4 判横長 460 頁 5,000 円(税込)

購入ご希望の方は、書名、数量、お名前、連絡先をお知らせください。
商品が到着しましたら同封の振込用紙にて代金をお支払いください。
商品代金の他に、別途送料をご負担ください。

お申し込みは 公益財団法人 米山梅吉記念館
TEL:055-986-2946 FAX:055-989-5101

米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分
東名沼津ICより15分

[開館時間] 午前10時～午後4時

[休館日] ●月曜日

●12月28日～1月4日

●整理のための休館日(5月・8月の特定日)

米山梅吉記念館 館報
Vol.37 春号

発行日／令和3年3月25日

発行者／公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 積 惟貞

〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101

URL <http://yoneyama-umekichi.jp/> E-mail yumh@ai.tnc.ne.jp